

公開講演会記録

従軍カメラマン ジョー・オダネル軍曹が撮影していた「焼き場に立つ少年」と長崎原爆は、漆黒の軍国列島を見事に抉り出していた

石飛 仁（会員）



はじめに

が現実です。あれだけの惨禍を招いたショック故に、ずっと後に、日の目を見ることになった核戦争を見事にとらえた傑作「焼き場に立つ少年」の写真にも、解明しなければならぬ真実も残されています。今回、敗戦直後の日本を捉えた従軍カメラマン、ジョー・オダネル軍曹の留守7か月のプライベート写真を通して、今に繋がる日本国民の敗戦直後の真姿を追ってみたいと思います。

ジョー・オダネル軍曹の船団

従軍カメラマン、ジョー・オダネル軍曹（23歳）の進駐軍としての足跡は、太平洋上を日本本土での決戦を目差す兵士



ローマ教皇フランシスコが印刷して広めるよう指示した「焼き場に立つ少年」の写真

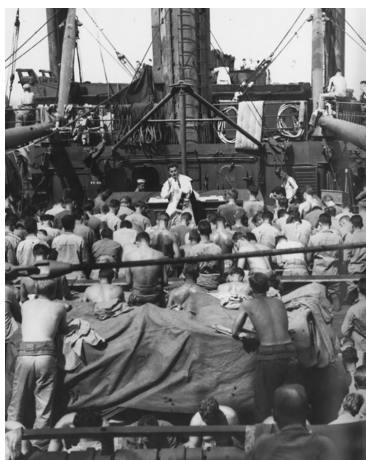
1941年12月8日に開始された太平洋戦争は1945年8月15日に終わります。しかし、実際その戦争突入と敗戦前後の事情は、決して今でも、明確になっているとは言い難い側面があります。特に、硫黄島陥落（2月）、帝都東京大空爆10万の死傷者（3月）、沖縄陥落（4月）、そして本土決戦状況に移行する当時の全国民の運命の日々と、驚愕の原爆2発投下（8月）による惨状から這い上がる敗北直後の時期のことは、さまざまに交差する非情の間隙に埋まったままで、決して、つまびらかにはできていないの

戦争がもたらすもの

Franciscus
（教皇フランシスコ）

亡くなった弟を背負い、
焼き場で順番を待つ少年。
この写真は、アメリカ古戦軍のカメラマン
ジョセフ・ロジャー・オダネル氏が
原爆後の長崎で撮影したものです。
この少年は、血がにじむほど唇を噛み締めて、
やり場のない悲しみをあらわしています。

輸送軍艦の船上の写真から始まっています。



『トランクの中の日本』（小学館）より

6月サイパンで乗船し・北上に向かったオダネル軍曹の乗った船団は、8月には、太平洋を北上する各船団と合流しながら、さらに大船団となり黒々と洋上を無数の軍艦で染めあげて日本列島を目指します。待ちかまえる日本列島上陸決戦は、海兵隊たちを日に日に奮い立たせていきました。ほとんどの兵士たちが牧師や司祭のミサに臨み無事に生還できることを祈願していました。

8月6日、船上で警報が鳴りました。「ホワイトハウスによれば今朝広島市に新型の爆弾が落とされた。この爆弾により10万人以上の死者を出したものだと思われる」。

ジョー・オダネル軍曹は、内心まさか

と思い、事実ではなくあくまでも日本本土に侵攻するわれら兵士の士気を高めるための作戦だと思ふことにしました。ところが3日後、8月9日、またしても警報が鳴りました。「大統領発表によると、長崎に落とされた2発目の新型爆弾で8万人が死亡した」。それは、ただごとではないと思ひ、もしかすると、これで、恐怖していた上陸作戦は、なくなるのではないか、日本との戦争は、巨大爆弾の投下で終わるのではないか、船内はざわめき、次の発表が待ちどおしくなりました。そして、さらに待ちに待った次の警報が鳴りました。「東京湾でマッカーサーが日本の降伏を受け入れることになった」と。皆この警報を聞いて故郷へ帰れると船上は興奮が渦巻きました。日本本土上陸による死の恐怖から若者たちは逃れることができたと安堵するのです。死を想定する戦闘を逃れることが確実になったのです。

日本本土上陸作戦は回避され、連合軍の戦闘上陸作戦は、進駐占領管理に切り替わっていくことになったのです。戦闘と占領管理は内容がまるで違います。

その劇的な変化を知らない、ある意味では名作「焼き場に立つ少年」の写真の真実を見逃すことになるのです。です

から、ここでは、実際の出入国の大変動の中で、一人の軍曹の駐留7か月の足跡をたどることが、消えた敗戦を掘り下げる一つの方法になるのだと思います。

ジョー・オダネル軍曹（23歳）の船団（海兵隊）5万が、長崎県の軍港佐世保に上陸したのが、1945年9月22日（23日）のことです。

それに先立つ情勢を見ながら、敗戦・進駐上陸・捕虜救出・労働力となっていた中国人・朝鮮人の出国、戦地からの帰還兵と家族の引き揚げを、見ておきたいと思ひます。

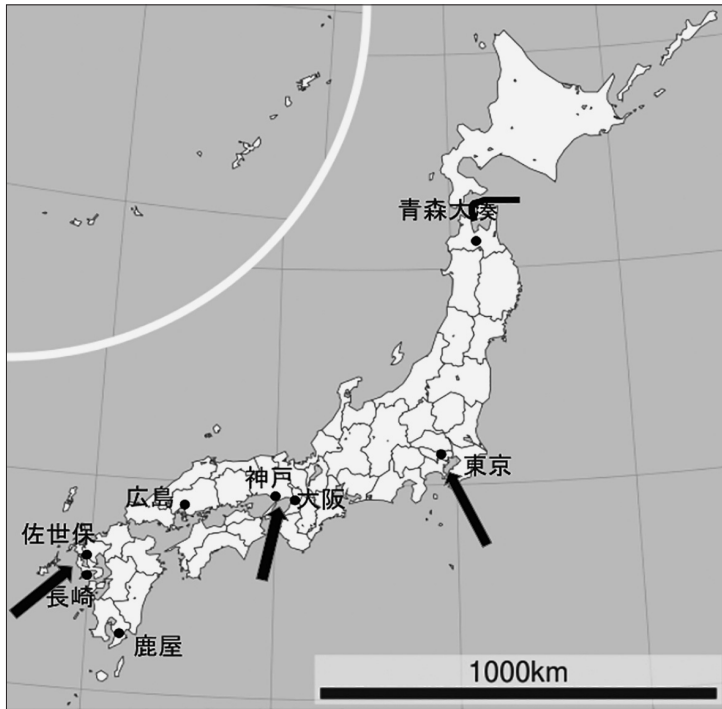
この戦闘体制から、占領支配に変わるという劇的な歴史の変化について、総括的、俯瞰的に解説したものが、言論統制の歪みもあって不足していますから、補強しながら見ていく必要があります。未曾有の出来事です。建前は国体が護持されたとしての降伏でしたが、実際がどうだったかは、結果したことを後付けするしかありません。何事にも、戦々恐々としながら進駐占領支配体制に移っていきます。

オダネル軍曹が上陸して、カメラを構えることになる以前の連合軍の行動を、図を使って簡単に見ておきたいと思ひます。

捕虜奪還作戦が最初の上陸作戦

1. 上陸作戦「ブラックリスト作戦」 (作成：石飛)

連合軍は、主に日本列島北から4か所が主なる上陸作戦「ブラックリスト作戦」を敢行します。このうち、中国・四国を英軍と豪軍（英系）に任せて、他は全部、



北海道から沖縄まで米軍が占領します。北が青森の大湊、関東・北陸・東北が東京湾、関西が神戸・大阪、九州が佐世保と長崎港からの上陸です。中国蔣介石国民党軍（連合軍）は、四国占領の案があったようですが、日本占領に参加することはできませんでした。東京（麻布）に代表部を開設するのがよつこのことでした。中国・四国は英・豪軍の占領区となります。

ここで、上陸直前の日本列島動乱期の説明をしてみます。

2. 華人勞工全国135か所

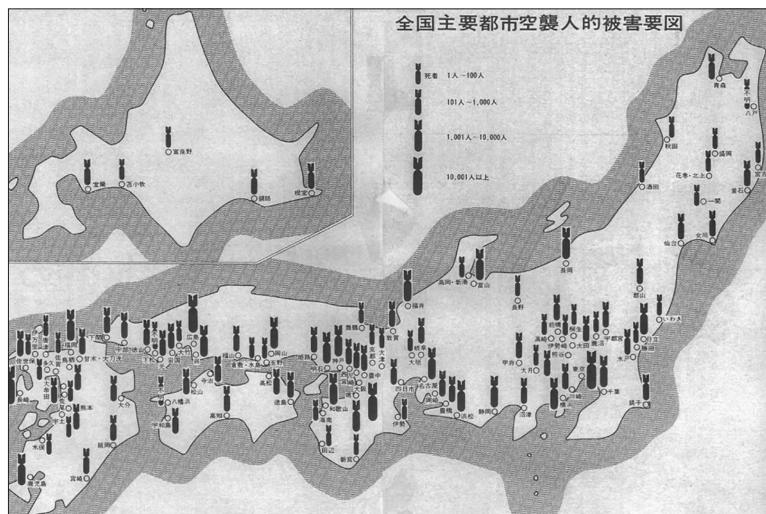
「華人勞工」4万人が移入政策による労働現場と宿舍がある全国135事業所の日本列島重要産業地点で働いていました（敗戦の年には6800人が死亡）。この事業所は、軍需産業の重要地点でしたから、日本に併合されていた朝鮮人労働者が単独や集団で寮（飯場）に、あるいは家族ごと社宅などに住み込んでの労働をしていたところでした。その数は60万人以上とされ

ていました。現在も二国間問題になっている徴用工の話は、その大半がこの重要産業地点で、雇用関係があつての問題です。

3. 連合軍の捕虜収容所

連合軍にとって日本攻撃時の最大なる関心事は、連合軍捕虜の救出です。捕虜救出作戦のことを「サマリタン作戦」と名づけて、全国107か所に点在していた捕虜収容所の地上救出作戦を実施しています。もちろん日本軍将校の案内で奥地の現場に到着しての話です。この作戦について、GHQ情報局G2のウィロビーは説明しています。捕虜収容所の兵士たち3万2000人の奪還と抑留者家族の解放が連合軍の最初の任務です。まず6万3000個のパラシュート、医薬品や食料、衣服をドラム缶に詰めてB29などから投下し、救出用病院船を東京湾に浮かべ、進駐軍本隊が到着する前に、捕虜収容所に近づいて救出しています。この捕虜救出は、9月12日前後に完了していました（ちなみに、秋田県花岡観音堂の日本軍管理の捕虜収容所「280人」は、9月12日の奪還です）。この捕虜救出作戦が終わると入れ替わるように全国4か所を中心に各地に進駐軍が続々と軍政を引いていきます。

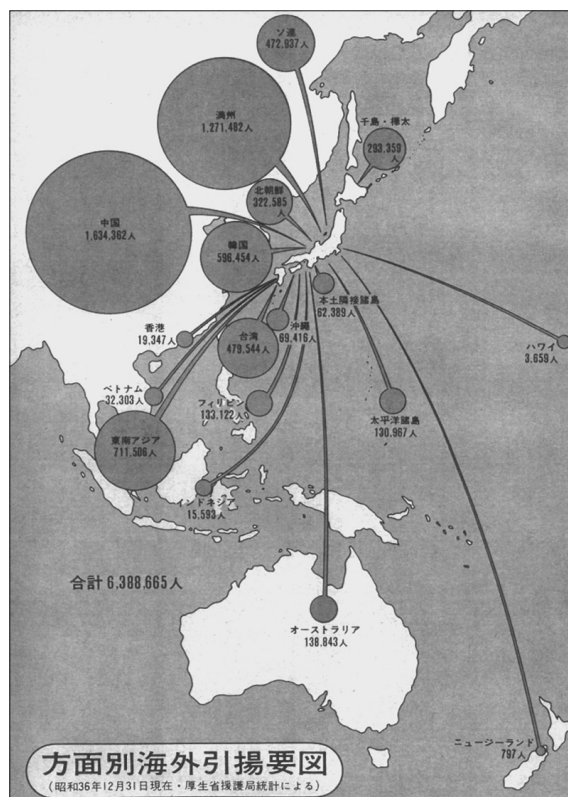
4. 日本列島空爆（出典：毎日新聞社



『二億人の昭和史 日本の戦史4』1975年）
あまりにも激しい空爆に連合軍の捕虜たちも疎開している例があるほどに日本の都市は壊滅的な空爆を受けています。壊滅都市の数は107都市、その死傷者数は約340万です。日本は戦闘態勢を解除して、上陸してくる占領軍を受け入

れる体制に切り替えていきます（武器の引き渡しと軍事体制解除）。その体制のチェンジは容易なことではありません。全戦線に展開していた日本の軍勢力は、陸軍が154個師団、その他が36個旅団、海軍が20個連隊、合計69万8千3百を数え、そのうち日本本土には57個師団、14個旅団、45個連隊、総数257万6815人でした。大戦争の戦線は、日本列島だけに限られるものではありませんから、厳密に言えば「撃ち方止め」の天皇の命令は、全戦線には届かず現地軍の判断での継続もあったようです。しかし、日本列島では、見事なまでに一斉に戦闘中止が守られて敵の軍門に下っています。そこへ後に南方から中国大陸から兵と抑留者が引き揚げられます。

5. 引き揚げ者（出典：「方面別海外引揚要図」厚生省援護局）合計63万8665人



日本上陸作戦には必要なかった原爆投下

この日本列島に上陸した占領軍が、日本を包囲するように、4つの方向から上陸していることは前述しましたが、日本の軍事占領と、原爆投下（国際的アピール）には、説明しがたい亀裂（違い）があることに触れておきます。ある意味では、後にたどるジョー・オダネルの人間復興としての覚醒とも関係すると思うからいうのです。終戦前の8月8日（ソ連

が宣戦布告した日）に進攻中の連合軍の現場最高司令官であるマッカーサーは「ブラックリスト作戦」と呼ばれた本土上陸作戦を立てましたが、これは、第2の原爆長崎への投下の前日のことです。つまり、原爆投下の件は、超極秘扱いの事項でしたから、前線指揮にあたっていたマッカーサー元帥には、広島原爆投下のことも2発目投下のことも、数日前にしか耳に入っていないのです。ですから、日本に進駐上陸して、占領していく連合軍の指揮現場には、原爆投下は、想定されていないことなのです。

つまり、軍事上、原爆投下は必要なかったという意味になるのです。極めて重要な事実ですので、マッカーサーの腹心ウィロビーの説明を、彼の回想録から抜き書きしておきます。「1944年10月に日本の軍需関係専門家会議が開かれました。私はこの時の記録を入手したが、それによれば日本の重工業及び軍需産業はにっちもさっちもいかない状態に置かれていた。：（米国は日本政府がソ連に講和の仲介を頼んでいる内容を傍受していた）：日本は息絶え絶えである。日本の息の根を止めるには、通常兵器で十分である。：ソ連は原爆が広島に投下されたまさにその翌日、日本に対して宣戦布告をした。：

マッカーサー元帥は原爆が投下されるほんの数日前まで、この爆弾が存在している事さえ知らなかった」（ウィロビー著『G H Q 知られざる諜報戦』山川出版社）のです。確かに、通常兵器で十分に軍事的占領は可能であり、それを前提にした上陸占領だったのです。そもそも、連合国軍最高司令官として、原爆投下された特別な地域であるはずの広島・長崎への進駐について、特段の駐留上の注意はしていないのです。広島は、特にイギリス軍による進駐ですから、被爆後の占領に対する知識のないままです。秘密扱いの被爆直後の調査団活動は当然あったであろうし、砂漠での実験と違って殺戮度、壊滅度を科学的に冷徹に把握する調査が同時に行われたであろうことは常識ですが、戦争中の前線指揮官が知らないのは必要なかった証左です。広島も、長崎も事前

に空襲を受けていて、壊滅しているのです。日本の全都市を容赦なく爆撃している、ルメイ将軍も、全く戦略戦術上、原爆投下作戦計画は知らないままに、大殺戮の焼夷弾爆撃を繰り返しているのです。長崎被爆地跡に足を踏み入れることになる軍曹ジョー・オダネルもまた恐ろしい後遺症のある原爆症のことなどは全く知らされていないのです。

原爆の実際の所有は、トルーマン大統領と数人しか知らない極秘事項です。その初の使用が、交戦中である日本こそを唯一のチャンスとしての投下というのは、間違いなく政治的に使われたということです。あくまでも上陸作戦時に軍事的に原爆投下は必要ではなかったのです。戦争はすでに日本の負けと決まって終わっている状態です。原爆を落とすために日本の降伏を日本に先延ばしさせる工作をしていたとする研究者（鳥居民）もいるほどです。この点は絶対に見逃すわけにはいかない大問題なのです。

8月15日に天皇がポツダム宣言を受諾し、大日本帝国の降伏を発表すると、連合国軍最高司令官に決まっていたマッカーサーは、8月19日に日本軍と日本政府の代表をマニラに呼び寄せて、日本全軍の武装解除と進駐軍受け入れについての筋道を決めて指示しています。マッカーサーが厚木飛行場に飛来したのは8月30日で、東京湾ミズリー号艦上での降伏調印式を行ったのが9月2日です。この9月2日の調印式のことをジョー・オダネル軍曹は洋上で聞いているのです。

佐世保に入った海兵団5万と、長崎港出島に別の2万5000の海兵隊が上陸して進駐しています。佐世保に上陸した

部隊は、北九州域を支配し、長崎に上陸した部隊は南九州域を支配します。南ではこれに加えて、空軍が鹿児島、鹿屋航空基地に飛行機で入って進駐しています。

ジョー・オダネル軍曹日本上陸の7か月の足取り

ジョー・オダネル軍曹の任務は、通訳付き、ジープで、拳銃携帯の撮影です。行動は、まず所属する軍務の活動記録であり、廃墟の市街地を撮るというものでした。彼の任務ですが、爆撃被害状況を、軍隊の活動と共に撮るということであり、必ずしも長崎市街の原爆被害状況を撮れというものではなかったのです。結果的に、長崎の廃墟を写真に撮ってはいませんが、プライベートに撮ったものです。

オダネル軍曹の写真が貴重なのは、あくまでもカメラマンの心をもって人物をプライベートに撮っていることです。彼自身が、興味を引く日本の風俗を撮っているのです。人物の表情などや、子どもたちの姿は、胸を打つものばかりなのです。何気ない日常の姿を捉えていますから、それだけに日本の敗戦直後の本当の姿を撮っていたということになるのです。よくぞ、そういう写真撮りが軍人の彼に

許されていたものだと感心します。

そんなことができたのは、2台も私物のカメラをもっていたという点にあります。その2台の高価なカメラは、廃墟の町となっていた佐世保のカメラ店で、たばこと交換して手に入れたというのです。2台のカメラは、スピード・グラフィックとローライ・フレックスです。私は、この点やや違和感を覚えます。当時の日本では、戦時統制経済の中でカメラはとくに軍に供出させられているはずではないのか、当時の鬼畜米英との戦いのさなか、日本人は皆、貴金属類・宝石類は全部供出済み状態です、いわんや写真機をやです。彼は、2台のカメラを手に入れて、公式と非公式を使い分けたと説明しています。そのような自由が軍務上あったということ：考えさせられます。日本の軍隊では、ビンタが連帯責任の証であり、野間宏の小説『真空地帯』には、日本軍の対外的強さは「恐怖の連帯」であり、捕虜になったら自決せよと言われているの極度の強制が無法野蛮行為も発生させていることが書かれています。

米軍の日本占領上陸作戦に参加した23歳の海兵隊軍曹の従軍カメラマン、ジョー・オダネルの行動を日本軍と比較してはいけないのかもしれませんが。ヤンキー兵に

はそれなりのリアルがあつての芸当かもしれません。

オダネル軍曹の7か月の大まかな足跡は、部隊の拠点（司令部）である佐世保に始まり、大村から諫早地区、そして福岡となり、その間に、長崎市街も撮り、神戸に飛行機で飛び、広島を空撮し、離れたところでは都城の市街を撮っています。ここは、おそらく海軍基地鹿屋の公務撮影だと思っています。この7か月の駐留中に彼は、プライベートカメラで「焼き場に立つ少年」を撮影しているのです。

オダネル軍曹の撮影の足取りは、次頁の地図で説明できます。まず、最初は大村に向かっての移動です。大村には、空爆を免れた日本の第21海軍航空廠本部棟（古賀島町）がありました。米軍の上陸部隊は、大村のその無傷の建築物に移動しています。長崎出島に上陸した2万5000人の第2海兵隊の司令部が、同じ大村の隣の諫早におかれた陸軍の兵舎に駐屯していますから、この一帯が一時には2つの司令部ができていたことになります。でもすぐに、長崎に上陸した海兵隊は、南九州へ展開し、佐世保に上陸したオダネルの部隊は、北九州福岡へと移ります。

オダネルが長崎の被爆地に入るのは、

ずっと後になりますが、かれが原爆の惨状に出あうのは、むしろ原爆救済病院になっていた、陸軍病院や海軍病院のあった大村や諫早でのことです。軍曹カメランの仕事は、大村と諫早をふくめて、この周辺の状況などを撮ることになっていたので。

8月9日の長崎原爆の被災者は、市街から逃げ出し救護を求めて、列車や徒歩、荷車などで、12キロ離れた諫早や15キロもある大村の病院へと殺到したのです。病院の前庭とその周辺は、原爆被災者が3000人もが逃げてきて治療を受けたところで、まさに生き地獄の場だったの



米軍上陸図「焼き場に立つ少年」の被災場所
(作図：石飛)

です。

被爆前の女性と子どもと老人たちでこの地区は守られていました。屈強な男たちは、戦地に取られていますから、男にかわって荷車を引いて長崎に勤労奉仕に出たりしたのです。自らも原爆被災者となるだけではなく、この地区の人は逃げ帰ってくる被災者の看護治療にもあたっているのです。ですから、そこへ米軍がきたのですから文字どおり、救護の面で解放軍ということになるのです。しかし、それは被爆から1か月後の救援です。それまでの、しばらくは、日本軍医の活躍となるしかないのです。この地区の人は7割の人が、被爆と2次感染により、死亡しています。爆心地から5キロから20キロ圏内の周囲のあちこちに、遺体の焼き場が存在していました。黒い雨を被った地域や放射能の風向きによる被害を、過小評価しようとする為政者の想像を遥かに超えた結果になっていたのです。

少年のいたのは北長崎地区

諫早よりずっと長崎より、長崎から10キロになる矢上村・戸石村は、被爆者の死体を焼く作業が河原などで10月になっても続いていたと思われます。『焼場に立つ少年』は何処へ(長崎新聞社)という本を書いている吉岡栄二郎の追跡調査では、この矢上地区の川岸で「焼場に立つ少年」を撮影しているのだろうとしています。そして、その日を10月6日か7日ではと、推定しています。その焼き場には、石灰がまかれていました。石灰は伝染病者の遺体を焼く場合を想定したものです。当時この地区では、被爆以前から伝染病が蔓延していたそうです。その上に、被爆者の後日死(血小板減少症)が続いて起きています。栄養不足と、治療対処の不足と、不衛生の上に、死の灰の影響を知らないまま、人はバタバタと突然のように死んでいるのは、被爆井戸水を飲んでいいるからです。被爆直後はやけどなどで咽が乾いて最後の水を飲んで、バタバタと死んでいく状態だったのですが、その時期を終えて、今度は、2次感染による影響で、見捨てられたまま数か月後に死んでいくのです。

その時期に、オダネルらしき米兵がこの付近を歩きまわっていたという記憶をもつ人物から、吉岡さんは、たくさんの



2016年12月、長崎市で開かれた国連軍縮会議で、原爆の熱線で負ったやけどの写真を見せる谷口稜暉さん
焼けただれた背中（『東京新聞』より）、向かって右の写真がジョー・オダネル撮影写真（モノクロ）

証言を得ていました。ジープで動き回り、何かを探すように1人で行き来している姿を皆がこわごわと見えています。

オダネル軍曹が、少年を撮影した日は、雨は降っていない薄曇りの日です。この矢上地区は、長崎に近いわけですが、この少年を撮影する数日前のことだろうと、私は思っています。彼はシャッターを切れなかったという衝撃の体験をしています。そのときに反射的に撮ったのが、有名な谷口稜暉青年（16歳）のやけどの

背中を撮っている写真です。

その日の出来事に触れておきたいと思っています。

「殺せ」と顔のない被爆者が…

オダネル軍曹は、谷口青年の写真を撮ったときに「殺してくれ」という焼けただれた男に会い、腐食する彼の胸に這う蛆虫を指でつまんでとってやり、顔かたちを失ったその皇軍兵士の男を、これ以上苦しみたくないようにと男の傍らで十字を切って祈りをささげているのです。祈ることが先でその男の悲惨な現実が写真に撮れていないのです。心のシャッターしか切れていないのです。「殺せ、殺せ」とつぶやく兵士から逃れるために撮ったのが、谷口稜暉青年の全部が焼けただれた背中だったのです。軍曹は人間としていかに生き地獄に遭遇したかという場面です。その日の夜は、その男の苦しみが乗り移って一睡もできず、翌朝再びその男のところに飛んでいきましたが、彼の姿はそこにはありませんでした。この病院は大村衛衛成陸軍病院だと思われれます。確かに、谷口青年の焼けただれた背中の写真は撮れておりジョー・オダネル軍曹の代表作になって残っています。だが「殺してく

れ」とつぶやく顔のない皇軍兵士の写真は撮れていないのです。

ジョー・オダネル軍曹は、ジープのエンジンジンをふかして周辺地域を被写体を探し求めて移動しています。そのたかぶった撮影根性をもって、ついに、そして、釘付けになる場面に、出あいます。

「石灰がまかれた焼場に10歳くらいの少年がやってきた。少年の背中には2歳くらいの男の子がくくりつけられていた。マスクをした係員は背中の幼児を下ろし、燃えさかる火の上に乗せた。間もなく、ジュウと油の焼ける音がして勢いよく燃え上がり、立ちつくす少年の顔を赤く染めた。少年は、軍人も顔負けする直立不動の姿勢でじっと前を見続けた。抱きしめてやりたい気持ちになったがもう一度シャッターをしっかりと切った。あまりにも深い悲しみがたちこめていて、少年の後ろ姿を見送ることしかできなかった」。名作「焼場に立つ少年」の生まれた瞬間です。

ジョー・オダネル軍曹が撮った感動的なこの写真「焼場に立つ少年」は、何処のだれなのか、どのような条件の下で撮影されたのか、それは、謎となってしまう。なぜなら、7か月間のうちに彼が撮った魂のプライベート写真は、米国

への帰国が決まるとともに、トランクに詰め込まれたまま、すべてのことが、以後ぶつかりと彼自身の手で封印されてしまうからなのです。

封印された駐留7か月プライベート写真

本人に聞けば済むことだったのですが、大きな歴史的背景があって、一兵士に何もかも聞きだせなかったのが現実の戦後史でした。ここでは、推測推理を使っての分析になりますので、原稿枚数の関係で割愛しますが、憎しみ合って成り立つのが戦争であり、「ジャップを仕留めたぜ」と帰国した米兵には、悲惨な日本人の姿は、長い沈黙が強いられていたと抽象的にしか言えません。だが、撮影者ジョー・オダネル自身も、自分が撮ったプライベート写真を44年間も封印していた経緯にはそれなりの道のりがあってのことでした。

歴代大統領側近カメラマンの座から46歳で退職して病魔に苦しんだ末に、その封印したままの写真をトランクから取り出したのは、人生上の大転換を経てのことであり、すでに67歳になって後のことでした。

戦争の記憶は薄れながら、彼は、年齢と共に蘇ってくるあの日々の写真たちを、アメリカで展示して歩くまでになる心の旅があったのです。人間復興を遂げているのです。

トランクを開けたのが、1989年67歳で、自らが原爆症の疑いのある闘病生活を経て、日本に写真展のため訪れたのが、1992年で70歳のときです。日本の人々と交流するようになってさらに3年後小学館より写真集『トランクの中の日本』が出ています。73歳のときです。写真展示後には何度も日本を訪問し、あの陸軍病院で撮った被爆者の一人、谷口稜暉（当時16歳）青年に、劇的な再会を果たし、福岡の奈良屋国民学校で授業中に撮ったかつては軍国少年少女たちにも、再会しています。だが、どうしても、会いたかった「焼場に立つ少年」には、探しても探しても会うことができずに、ジョー・オダネルは2007年85歳で亡くなっています。2007年8月9日長崎原爆投下と同じ日に、アメリカ・ナッシュビルの自宅で、再婚していた日本人妻と後継者になった息子オダネルに見守られながらのことです。

「少年は何処に」

何故、「焼場に立つ少年」の少年と再会が果たせなかったのかという問題を探るためには、彼が亡くなってから、彼の日本駐留7か月間の足跡を精密に5年追いかけて刊行した、先に紹介した吉岡栄二郎の著作が唯一の参考になる書です。ジョー・オダネル死去から6年目にできたこの本は、2007年と2012年の5年間、少年は、どこのだれかを追跡した記録です。

美術評論家であった吉岡は、写真家ロバート・キャパの大作、銃弾に倒れる兵士の写真を検証した作家でもあり、この少年を追ったこのルポも大変な力作です。2015年8月2日号「公明新聞」に少年の晩年のことを書いていました。少年の名前が、戸石村（旧高来郡）尾崎にいた上戸明宏君だとしたうえで、80歳で小長井（長崎県）で、亡くなっていることを同級生から聞いた消息として書いています。「嫁ぎ先で子を失った母の悲しみを受けつぎ、僅か2歳の短い生涯を終えた弟を背なから降ろして葬った後、小長井に戻った母を助けて行商し、すべてをそっと心に秘めて逝った明宏君」と。

フランシスコ教皇来日時に蘇った ジョー・オダネル軍曹の「焼き場に 立つ少年」

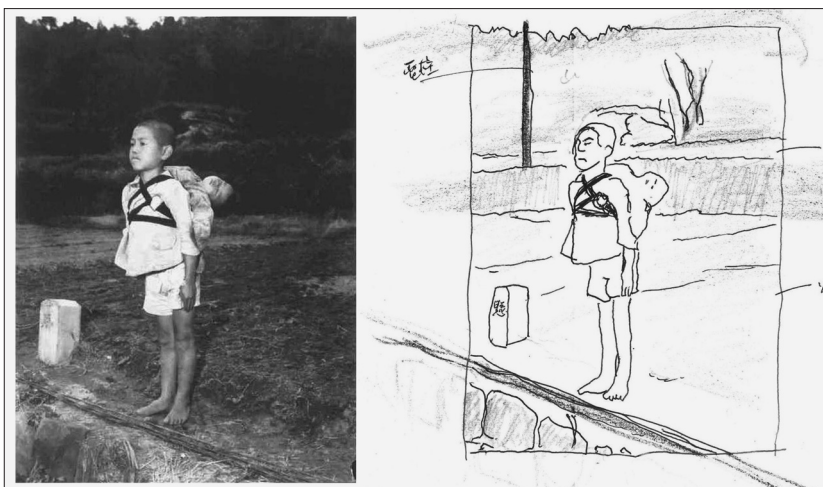
この少年の写真が、フランシスコ・ローマ教皇の目に留まった経緯は、次のようなものだったことが新しく判りました。船橋教区のカトリック信者の一人、故佐々木孝さんは、2017年8月9日（長崎被爆忌）ニコラウス神父（前イエズス会総会長）に平和の祈りの写真として送ると、今度はその写真が、ことのほか核兵器廃絶に熱心なフランシスコ・ローマ教皇に送られました。すると、フランシスコ・ローマ教皇は、2018年1月15日、南米チリ訪問時、世界の同行記者を前に、一人一人に少年の写真を配布しながら言いました。「この写真を見た時ひどく心を動かされた。戦争の結末を長々と書くよりも、このような写真は、数千の言葉より心に迫ってくるのだ」と。

フランシスコ・ローマ教皇の日本訪問が決まると、世界の信者たちに向けて少年の写真をカードにして「戦争がもたらすもの」とメッセージを添えて全世界に配布されたのです。

なかったのだろうか。封印と開封によって真実が歪められたネガとなって記憶の忘却と重なり不明になる力に押しつぶされたと思えません。少年が名乗り出ようにもその場面はなかったのです。背景はカットされ裏焼きにされています。ローマ教皇が平和のカードに使用した少年の写真は、1995年73歳のときに日本で出版された『トランクの中の日本』（小学館）からの引用したものでしたが、このとき使用された写真は、裏焼きになったものであり、さらにジョー・オダネル軍曹が撮ったときのネガには、背景の山並みが写っているものの、写真集ではカットされています。さらにその後、ローマ教皇来日が正式に決まって、少年の写真が2019年に話題になると、長崎の被爆写真に詳しい松尾隆氏によって、写真は裏焼きであることが指摘されています。戦時中の少年・少女は皆、胸に出身校と学年、氏名を書いた名札をつけることになっていった点や、ボタンが左右逆になっており、足元の石標の字「縣」も左右逆になっている点など、あきらかに写真は裏焼きとなったものでした。敗戦直後を紐解くうえで、少年の背後の風景がカットされていたり裏焼きのままだったりすることが、なにやら見捨てられてきた戦

災孤児の悲劇に重なります。

それでも少年はしっかりと訴えています。戦争するなと！



カット以前の正しい写真（裏焼きの指摘は松尾隆氏）

（2020年11月26日・第2回オンライン講演会）